

日本の未来を見据えて撃つ！
そんなあなたにホットな話題をお送りする
最先端オピニオン紙



日本シティジャーナル

発行: ネットハウス
〒286-0825 千葉県成田市新泉 14-3
TEL 0476-89-2333 FAX 0476-89-2334
[平日: 10:00~19:00、土曜: 12:00~17:00]
<http://www.nihoncity.com>
成田市、佐倉市、印西市、富里市、香取市、山武市、船橋市
千葉市(花見川区、美浜区)、習志野市、八千代市、西街道市
高千穂町、茨城、小林、安良、多古町、横芝光町、芝山町、神崎町
発行部数: 500,000部

邪馬台国への道のり Part.XV 投馬国から40日の旅路を経て見えてくる山上国家の姿

古代の日本社会における交通網の中心として位置づけられた瀬戸内海は、その狭い海峡に多くの島々が散在するため航海路を見失う危険性が高いたくなく、潮の流れも早く、海流が不安定であったことから、海の難所として知られていました。それ故、九州方面から瀬戸内海を東方に移動する際は、国東半島から佐田岬を経由して航海することが、最も安全な航海路として認識されたのです。また、四国の松山には今日、道後温泉と呼ばれる温泉が古くから湧き出でており、神々が出雲の国から伊予の国へと旅し、病に伏した際に温泉に浸かり、癒された話が釈日本紀等にも記載されています。それ故、瀬戸内海を伊予の海岸線に沿って旅することは、古くから当然のこととして受け止められたのでしょう。こうして不弥国からおよそ20日の航海を経て投馬国に到達し、そこから更に舟旅を続けたのです。

邪馬台国へ繋がる最終港は姫路か？

[投馬国から] 南にすすみ邪馬壹国に到着する。ここは女王の都している所であり、水行10日、陸行1ヶ月かかる

投馬国から邪馬台国に向かうには、まず港を出てから南に進み、それから10日間航海を続け、その後、陸地を徒歩で1ヶ月旅

することが、魏志倭人伝等の中国史書に記載されています。投馬国の比定地として提唱した今治は来島海峡に面しており、そこから四国の海岸線は南南東の方向に20km以上伸びています。よって、今治からは史書の記述通り、まず、南の方向に向かって航海を始めることができます。

不弥国から投馬国まで、国東半島から佐田岬、伊予・松山を経由する航海路には、およそ300kmの海路に20日という日数をかけています。つまり、1日平均の渡航距離を約15kmとみているのです。前述した通り、天候不順や強風、高波等の理由で航海できない日も多々ある故、渡航にかかる総日数からの平均的な渡航距離として考えるならば、1日、15km程度しか舟で進むことができないと考えて妥当でしょう。その前提で考えるならば、投馬国から10日の航海は150kmの旅路を意味します。今治から150kmの海路をおおよそ海岸沿いに70km航海すると観音寺に到達します。近くには金刀比羅宮が存在し、長く危険な航海を続ける古代の民にとって、神の守護をお願いすることは極めて重要な風習であったに違いありません。更に30km程進むと丸亀に到着し、残り50km程の航海で、邪馬台国への道に繋がる港が見えてくるのです。

その港の場所が、邪馬台国の位置づけを左右するキーポイントになることから、丸亀からの航海路の方向性は極めて重要です。可能性は二者択一となります。まず、四国沿岸を離れて北東に向かい、小豆島の西を通りぬけて、瀬戸内海北岸の姫路へと向かう海路があります。投馬国からの航海距離は180km強となり、当初の想定よりも30kmほど長くなりますが、想定内の距離と言えます。もう一つの選択肢は、四国の沿岸を航海し続けることです。すると丸亀からおおよそ50kmに位置する讃岐が投馬国から150kmの地点となり、更に20km足らずで東香川に到達します。投馬国から水行10日で着岸する港は姫路でしょうか、それとも四国の東香川でしょうか。

まず、姫路の港からの陸路を前提に、兵庫県の中央東部に位置する丹波や、京都北部の丹波国が邪馬台国である可能性を地理的側面から考察してみました。姫路から丹波までは直線距離で約60km、勾配がゆるい川沿いを歩くと約70kmの距離です。山陽と山陰の間に聳え立つ山脈は意外と険しいことで知られ、丹波の北西にある栗鹿山も、その急斜面が際立っています。しかしながら、標高は962m程度の山であり、高低差はさほどないのです。また、丹波市内の水

分れ公園は、瀬戸内海に向けて70km、北方にも日本海へ向けて70km流れる川の上流分岐点にあたります。その場所は本州で一番低い中央分水界としても知られ、海拔は95mしかありません。つまり姫路から川沿いを迎れば、山々の急斜面を避けながら丹波に向けて旅をすることができるのです。

史書の記述によると、最終港から邪馬台国への陸行は30日かかります。しかし姫路から丹波までは、途中の山々がもたらす急斜面を考慮したとしても、7日もかけずに到達できてしまうのです。丹波特有の地勢を検討するならば、そこが邪馬台国であると想定するには無理があるようです。また、丹波方面まで足を延ばすことも考えられますが、一つ大きな問題が残ります。もし、日本海側に邪馬台国が存在したとするならば、わざわざ周防灘から瀬戸内海を経由して航海する必要はなく、対馬海流のついで日本海沿岸を渡航すれば良いはずですが、瀬戸内海を経由することにより、姫路から途中、山岳を越えて北上しなければならず、理不尽な旅路と言わざるをえません。また、古代社会における日本海側の港や集落の発展についても疑問が残ります。更に邪馬台国を日本海側に位置付けることにより、築浪郡の東南方向という史書の記述内容から乖離してしまうことになります。それ故、邪馬台国が丹波や丹後周辺に存在した可能性は極めて低いと言わざるをえません。

次に姫路から大阪方面へと向かい、その先の近畿南部に邪馬台国が存在していた可能性を考察してみよう。邪馬台国の比定地については、九州に並び、奈良盆地周辺を候補地とする見解は根強く、新井白石や本居宣長を筆頭に、多くの学者が大和の国を邪馬台国と比定し、また、奈良県の桜井や、奥吉野から紀州一帯を比定地とした学者も多数います。そこで今一度、史書の記述に照らし合わせながら、その地理的要因を検証しました。

奈良盆地は、標高差がさほど無い丘陵に囲れている平坦な場所です。姫路から奈良までは約120km、また桜井まで約130kmの道のりとなり、好条件に恵まれていることから、いずれも徒歩で3-4日の距離です。陸行30日という旅程を考慮するならば、邪馬台国を目指して瀬戸内海から大和の国へ向かうということも、奈良は単なる通過点となり、目的地は、その先になければならぬということになります。奈良盆地も一度その南端を通りすぎると険しい山が聳え立ち始め、大変な山岳地帯となります。そして奈良県南部、吉野川流域より更に南の奥吉野と呼ばれる山岳地域や、十津川流域、熊野方面に足を運ぶと、かなりの日数を要します。果たしてそこに邪馬台国が存在したのでしょうか。

史書の記述と矛盾する近畿南部説

奥吉野や紀州、近畿南部を邪馬台国の比定地とした場合、中国史書に記載されている邪馬台国の地理的要因に関する記述とは相いれない幾つかの難題に直面します。まず、「帯方郡より女王国に至る間の距離は一万二千里である」という記述に注目です。朝鮮半島西北部の大同江河口から一万二千里という距離は、短里の距離を80mと仮定しても、1000km程が限界です。帯方郡から、その距離に該当する地域は淡路島周辺が限度であり、大阪や奈良でさえも含まれません。奈良や桜井までは1050km前後となり、短里を87.5mとしない限り、つじつまが合わないのです。その南の十津川までは1080kmの距離となり、短里75mの想定では、一万四千里にもなってしまいます。

次に「女王国の東、海を渡ること千余里のなたに、また国がある」という記述です。邪馬台国の東方には海があり、約
次頁に続く

邪馬台国比定地への想定ルート



7-80km海を渡ると、そこに国が存在したといふこと。ところが奥吉野、紀州の東方には海しかなく、陸地がありません。その為、邪馬台国の東先端を伊勢・鳥羽周辺と想定しなければ、東方に陸地が見えてこないのです。その前提で伊勢から海を渡り、三河湾の奥にある豊橋まで北東に航海すれば、その距離はおよそ60kmとなり、短里の千余りに近い距離となります。しかし、奥吉野から伊勢・鳥羽までは100km前後の距離があり、渥美半島を過ぎて三河湾の一番奥まで航海するという想定にも難があります。更に鳥羽・伊勢から伊良湖岬は目先に見え、距離も20kmしかないことから、果たしてその岬を無視して「海を渡ること千余里のかなた」と語ることができるか、疑問が残ります。

3つ目の問題は、「その南に侏儒国がある。この国は女王国から四千里離れている。」という記述です。邪馬台国の南には背丈の低い人が住む、小人の国があるということですが、近畿南部の南には海しかありません。そして難関は隋書の倭国伝に見られる「倭国の領域は、東西は徒歩5ヶ月、南北は徒歩3ヶ月で、おのおの海に至る。」という記述です。つまり、邪馬台国が存在する倭国とは、東西南北が海で囲まれた島であり、東西の方が南北よりも長く、しかも徒歩で3-5ヶ月もかかる程、距離が長い、大変険しい道のりを有する地勢であるということです。奈良や桜井、奥吉野、紀州を邪馬台国の比定地とした場合、解釈のしようがありません。これらの史書の記述から察するに、邪馬台国の比定地を奈良や桜井、奥吉野とすることは困難と言えそうです。

史書の記述と合致する四国

次に四国の東香川からの陸路を前提に、史書の記述と照合してみました。四国の山岳は、その急斜面と、聳え立つ多くの崖が旅人の道筋を阻み、壮大なスケールの峡谷を誇示します。これらの山々は、人間が上り降りすることができるような山道を見出すことさえ不可能な絶壁や急斜面が多く、今日、車を運転しながら四国の高山を眺めるだけでも、その急勾配と崖や絶壁の多さに驚嘆されることでしょう。それ故、遠い昔から四国の山々を渡り歩いた人間は、できるだけ山道を見出す努力をしました。

四国八十八ヶ所の遍路も、第11番札所の藤井寺から第12番札所の焼山寺までは、往古の姿を留める急勾配の続く狭い遍路が通じ、頑強な足腰がなければ歩き抜けることができない難関

として有名です。直線距離では8.2kmしかなくとも、実際には山を2つ超え、標高40mの藤井寺から標高700m近くの焼山寺まで、標高差660mを大きく上下しながら上りつめることから、その歩行距離は13kmにもなるとも言われています。それ故、徒歩で丸1日歩き続けなければなりません。どうりで冬の遍路を第12番札所に向けて歩む民は、昔から死を覚悟していたと言われていた訳です。途中で怪我をしたり力尽きてしまえば、それが命取りとなって山で命を落とすことを意味していたのです。よって白い衣を身にまとい、いつ死んでも良いという信念を持って遍路に臨んだ訳です。

急勾配が多い焼山寺までの遍路でさえも、実は厳しい山道の始まりしかすぎません。焼山寺は標高938メートルの焼山寺山の標高、700mの地点に造営されましたが、山の南側にはその2倍前後の標高を誇る山々が聳え立ちます。南西には、かつては人を寄せ付けない険峻な山として知られる標高1,495mの雲早山、そして西側の釜谷峠を超えると、深い原生林に囲まれ、殆ど人が足を踏み入れることのない標高1,627mの高城山が続きます。その尾根伝い、西方向に四国の霊山、剣山が聳え立ちます。そして剣山周辺の山々の多くは、何故かしら頂上周辺に樹木が無く、ミヤクマザサやコメツツジなどが不思議と生茂っています。

一見して人が寄りつきづらい山岳地帯の多い四国ではありますが、そのような山奥に邪馬台国が存在した可能性はあるのでしょうか。中国史書の記述を参考に、その地勢を検証してみました。まず、朝鮮半島の帯方郡からの方角と距離を考えてみましょう。既に解説した通り、四国の中心部は帯方郡から見てちょうど東南の位置にあります。また短里を70-78kmとして一万二千里を考慮すると840~1000kmとなり、ちょうどその距離の範囲に四国の大半は合致します。更に、「女王国の東、海を渡ること千余里のかなたに、また国がある」という記述についても、東香川を邪馬台国への入り口とした場合、そこから東方に72km海を渡ると、紀ノ川の河口に和歌山があることから、その距離は千余里という史書の記述と合致していることがわかります。

次の難関は、「南方四千里離れたところに侏儒国がある」という記述です。南方への距離を計るための基点をどこに置かにもよりますが、四国の最南端、足摺岬をその基点とするならば答えが出ます。そこから四千里、およそ280km南西の方角には奄美大島があり、それを侏儒国と

解釈できます。実際、奄美大島を含む南西諸島は、元来、日本国内で最も平均身長が低い地域として知られていることから、遠い昔には背丈の低い民族が集落を作っていた可能性があります。それが侏儒国と呼ばれるようになったのでしょう。

最後のハードルは「東西は徒歩5ヶ月、南北は徒歩3ヶ月で、おのおの海に至る。」という「島」の大きさに関する条件です。四国は地図を一見するだけで、東西の距離の方が、南北よりも長いことがわかります。実際、西の佐田岬から東の徳島沿岸まではおおよそ250kmあります。また、南北で一番長い箇所は北の今治から南の足摺岬で、その距離は約150kmです。つまり東西と南北の距離の比は5対3です。史書の記述では徒歩5ヶ月と3ヶ月と記載されていますが、その数字の割合と並ぶのは、単なる偶然でしょうか。また、四国の山岳は大変険しいが故に、徒歩で島を横断するには、東西方向は約5ヶ月、南北方向は約3ヶ月の日数を有すると考えられるのです。邪馬台国の地勢に関する史書の記述は四国と見事に合致していることから、その可能性を今一度、見直す必要があります。

四国の牧場は高地性集落の跡

投馬国より10日の舟旅を終えて最後の港に到達した後、そこから邪馬台国へ向かう為には、更に30日間、陸地を歩かなければなりません。邪馬台国の場所が四国山上にあると仮定するならば、その険しい山岳事情から、1ヶ月という長旅の必要性を理解できます。では何故、邪馬台国が海から遠く離れた山上に存在しなければならなかったのでしょうか。その答えが、弥生時代中期後半から突如として瀬戸内海を中心に出現した高地性集落の存在です。

既に解説した通り、高地性集落の実態は未だ十分に理解されていません。多くの集落は、山の頂上近辺という一番、日常生活において不便な場所にわざわざ造られていることから、宗教的な動機がその背景にあったと考えられます。古代、日本へ到来したと考えられるイスラエルの民は、当初、南西諸島を経由して、待望していた「東の島々」に辿り着きました。そして彼らは聖書に記載されている予言通り、新天地において一番高い山を求め、そこで神の訪れを待ったに違いないのです。高き所は聖なる場所であり、神はその高い山に君臨する、という信仰があったからこそ、それが高地性集落を造る動機づけになったのです。

国生みはイスラエルからの渡

来者により、淡路島から始まりました。そして列島を巡り周った後、島々の頂上に祭祀が集い、高地性集落を造りあげたのではないのでしょうか。高き所で祈りを捧げ、島全体を清めることの大切さを信じていた民だけに、山上における集落の造成は、積極的に試みられたようです。特に淡路島から最も近く、瀬戸内海の島々を一望できる四国は、標高の高い連山の存在からしても民の憧れでした。淡路島からは、海を隔てて四国の山脈を遠く眺めることができるだけでなく、標高1955mの高さを誇る剣山の頂上が、山々の背後に少しだけ突き出ています。雄姿を肉眼でもはっきりと見ることが出来ます。その剣山が、高地性集落の最終目的地になったと考えられるのです。そしてイスラエル民族の強い信仰が、山々に至る経路がとてつもなく険しい道のりであること、何ら苦にならなかつたのでしょう。それが四国の山岳地帯で、常識では考えられないような高地性集落が造られていった理由です。

高地性集落が長い年月をかけて徐々に発展した後、時代の流れと共に卑弥呼が国家のリーダーとして台頭する時代が訪れました。霊能力に優れた卑弥呼は、人里離れた山奥に籠もり、そこで祈りを捧げ、大きな政治力を振るうようになりました。古代、イスラエルの偉大な預言者らも、モーセを筆頭に皆、山に籠もり、神と出会い、霊能力を磨いたものでした。魏志倭人伝には、卑弥呼について、「鬼道に仕え、[その霊力で]能く人心を惑わしている。...彼女を見た者は少ない」と記載されています。この記述も、卑弥呼が山奥に籠もっていたことをほのめかしているようです。邪馬台国とは山奥にしか存在し得ない国家だったので、邪馬台国が四国の山上に存在したことを示唆するもうひとつの根拠が、牧場の存在です。剣山の西方、奥祖谷周辺は、今日でも段々畑が多くみられ、驚く程急な山の斜面に家が建ち並んでいます。地元の方の話によると、奥祖谷周辺では明治時代まで広大な牧場が山上に存在していたとのこと。ところが国の近代化が進むにつれて、村の若い人達が続々と都会に出稼ぎに行き、村に戻らなくなったことから、牧場を管理する人がいなくなってしまったそうです。その為、殆どは聖書に記載されている予言通り、新天地において一番高い山を求め、そこで神の訪れを待ったに違いないのです。高き所は聖なる場所であり、神はその高い山に君臨する、という信仰があったからこそ、それが高地性集落を造る動機づけになったのです。

弥生時代中期後半から突如として瀬戸内海を中心に出現した高地性集落の存在です。剣山の西方、奥祖谷周辺は、今日でも段々畑が多くみられ、驚く程急な山の斜面に家が建ち並んでいます。地元の方の話によると、奥祖谷周辺では明治時代まで広大な牧場が山上に存在していたとのこと。ところが国の近代化が進むにつれて、村の若い人達が続々と都会に出稼ぎに行き、村に戻らなくなったことから、牧場を管理する人がいなくなってしまったそうです。その為、殆どは聖書に記載されている予言通り、新天地において一番高い山を求め、そこで神の訪れを待ったに違いないのです。高き所は聖なる場所であり、神はその高い山に君臨する、という信仰があったからこそ、それが高地性集落を造る動機づけになったのです。

しかしなぜ故に、四国山上の各地に広大な牧場が存在したのでしょうか。その背景にこそ、高地性集落の存在があったとは考えられないのでしょうか。四国周辺の山々には、元来、高山性の樹



南淡路の丘の上から眺める剣山の頂上

木が覆い茂り、剣山周辺から東方は神山町まで囲む地域も例外ではありません。ところが古代、列島を訪れた渡来者は、高地性集落を造営する為、山上周辺の樹木を切り倒し、集落を造るための資材として用いたり、時には山を焼いて樹木を除去する必要がありました。弥生時代では、西日本において移住地を造成するために森林焼却と焼き畑耕作が行われていたことが花粉分析などからもわかっており、四国の高山においても、同様の森林焼却が行われたのです。こうして山上国家の造営を目論んだ渡来者により、四国の山上に集落が造られていきましたが、その後、時代の移り変わりと共に高地性集落は姿を消すこととなります。そして跡がたもなく焼かれて消滅した集落も多く、その結果、山々が禿山と化したのです。これら集落の跡地を装う禿山のなだらかな斜面では、後世、いつしか牧場が営まれるようになったと想定されます。樹木の無い、野原のような四国の山々に、高地性集落が遠い昔に存在していた形跡を垣間見ることができるのです。

亜高山植物が証する山上国家

四国の山々を真上から衛星写真で見ると、頂上周辺の生態系が大きく変貌している実態がよくわかります。本来、樹木が覆いつけられているはずの高山でも、剣山を中心とする一角だけは、山の頂上周辺に木が無いのです。その代わりにミヤクマザサや、コメツツジが生い茂る場所として知られるようになりました。四国の高山においてササ草原が生い茂る場所を検証すると、標高の高い場所に見ながら、何故かしら起伏の緩やかな場所が目に入り、山の周辺には湧き水や池等の水源が存在することが多いのです。

四国の山上に広がるミヤクマザサは、一般的には標高1600m以上の本州中部、及び南部の太平洋側に分布しています。そして積雪量のさほど多くない四国の亜高山帯には本来分布しないはずが、何故か、この深雪地帯のミヤクマザサが広範囲に分布しているのです。しかもこのササ草原の所々に大規模なコメツツジが団塊に見られ、特に岩石が露出している場所や、土壌の堆積が浅いエリアに集中して分布しています。このような例は全国でも類がないため、剣山の西側、三嶺と天狗塚の間に広がるコメツツジとミヤクマザサ

の群落は、国の天然記念物に指定されている程です。この特異性は自然の現象と考える向きもありますが、果たしてそうでしょうか。

ササ原は三嶺と天狗塚間だけでなく、杉造林が集中的に行われた木屋平を越える地域まで広がり、それらの山々の中心となるのが剣山です。その北側の麓には、所々になだらかな斜面を有する丸笹山、赤帽子山、中尾山があり、東側には一の森と天神丸があります。また、西側には次郎笈、塔ノ丸、三嶺と天狗塚。そしてその先には矢筈山があります。奥祖谷の北側の外れにはなりましたが、吉野川にも近い標高1332mの腕山には、今日でも県営腕山牧場が存在することも注目に値します。これらの山々は、その殆どが剣山の北側に在り、東西に23km程、南北には12km程の範囲に集中しています。そしてこの山も、その頂上周辺から山の中腹にかけて、ササ原やコマツツジで生い茂る場所が顕著に見られます。

これらの山々に生茂る四国特有の亜高山性植物こそ、多くの人間が長年、居住した高地性集落の結果として生じた現象と捉えるべきではないでしょうか。四国の山々では集落を造成するために樹木が撤去され、時には焼かれたりすることもあり、多くの人が居住する為の水源も確保されたことでしょうか。こうして自然の環境に人間の手が入り、高地性集落が造成されたのです。そして時代の流れと共に集落は消え去る運命となり、最終的に焼き葬られた集落の跡が禿山となり、標高が1500m以上の高山では、その跡地にミヤマコマツツジやコマツツジが生い茂るようになったのです。剣山周辺の山々を覆う四国のササ原は、高地性集落の余韻を残しているように思えてなりません。

高地性集落の跡に広がる杉造林

高地性集落が存在した跡地では、標高が1500m以上の高い地域では亜高山性植物が生い茂る山々の様相を呈しましたが、標高の低い地域では禿山として残ってしまう山も多かったと想定されます。樹木が消滅した場所では後世において、所々に牧場が営まれるようになることもありました。しかしながら、やがてこれらの牧場も国家の近代化と共に消滅する運びとなり、その跡地を再度有効活用するという理由で始まったのが、杉造林です。

1900年前後から西日本各地で杉やヒノキの造林が盛んになり、四国では特に、杉造林が積極的に行われました。そして最終的には二十世紀前半にかけて、吉野川を境にその南側の殆どの山々において杉造林が行われる結果となりました。造林に適した土地

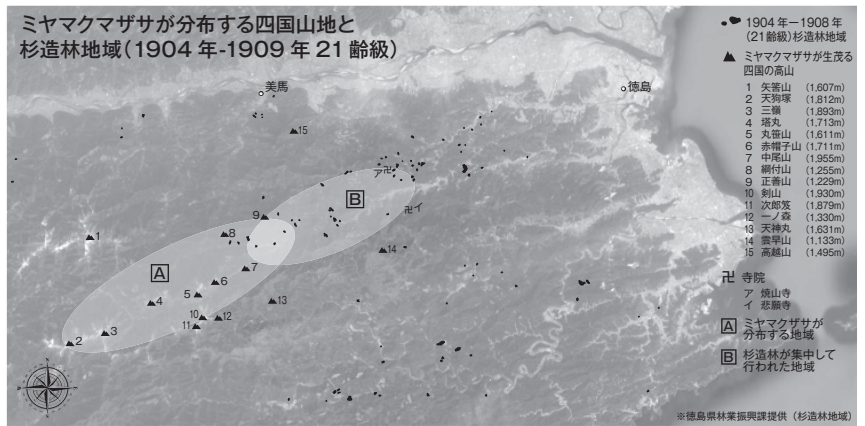
面積は広大ですが、その作業がどの地域から集中的に始まったかを見極めることにより、造林が最も必要とされた禿山が多い場所を特定することができます。

徳島県の林業振興課によると、造林に関する管理台帳は明治後期、1904年分から5年ごとの齢級ごとに保管してあるものの、それ以前の造林データは法未整備の時代のため、台帳レベルで整理されたデータはないとのことです。しかしながら、四国における行政主導の大規模な造林プロジェクトの始まりは21世紀に入ってからのことですから、1904年からのデータで十分です。そこで1904年から当初の5年間、徳島県において21齢級の植林が行われた造林データを見てみました。当初の予想通り、杉造林が始まったエリアは剣山の麓から東北東の神山町方面に向かう地域に集中していました。その西側の端は、剣山より北東10kmに位置する正善山と綱付山に近い木屋平から、東側は焼山寺、悲願寺にまたがる神山町まで、やや右肩上がりで東西20数十キロ程広がる地域にある山々の多くが杉造林の対象エリアとなっていたのです。そして1909年以降の20齢級杉造林も、これらの地域を中心として更なる造林が進められていきました。

その後、山全体が植林される例も見られるようになり、例えば木屋平の名峰であり、古の剣山道の途中にある正善山などは、山がまるごと植林されて現在に至っています。正善山の南西にある杖立峠は、霊山剣山への参詣道として使われた経路の途中にあり、今日では道路が造成された為に古き峠道は消滅してしまいましたが、地元の言い伝えでは、遠い昔から剣山にお参りに行く際には、その北側に古くから造営された石尾神社にまずお参りし、それから杖立峠に上り、そこで杖を立ってから剣山に向かったと語り継がれてきています。

興味深い点としては、当初から杉造林が最も集中して行われた場所が、焼山寺と悲願寺周辺から剣山の方面へ向かう地域を含むことです。焼山寺は標高938mの焼山寺山の8合目に造営され、その名前の通り、言われは太蛇により全山に火が放たれ、山が燃えあがったことにより、そしてその太蛇を退治する為に空海が活躍されたと伝承されてきました。それは遠い昔、何らかの理由で山が焼かれ、山が燃えあがったことを示唆するものではないでしょうか。また、悲願寺は標高700mの山頂に建てられた寺であり、伝説によるとその境内は串弥呼の宮居跡と言われ、祭壇跡と考えられる台座や磐座が残っています。

その途中、標高がまだ、さほど高くない神山から木屋平周辺の山々では、杉造林が集中して行われた地域が広がり、木屋平よりも西側に聳え立つ標高が1500mを超える山々ではミヤマコマツツジが随所に生茂っています。そして広大なササ



高地性集落が存在した跡地であると推測される地域だからこそ、杉造林の必要性が生じたと推定する訳ですが、その造林作業が最も集中的に行われた地域の東方の端に、串弥呼の宮居跡と語り継がれてきた伝説の場所が存在し、しかも周囲の山々が焼かれたことを証する焼山寺もあつたことに、不思議な繋がりを感じないではいられません。

空海と焼山寺、串弥呼の伝説が残されている悲願寺、そして剣山が、杉造林の歴史の背景に古くから存在した多くの禿山や、荒蕪した牧場の跡、そして剣山の方向に広がるササ原とコマツツジ群集の存在は、これらの山々において、遠い昔、高地性集落が存在していたことを証しているように思えてなりません。

神山から剣山に存在した邪馬台国の結末

魏志倭人伝の記述を頼りに邪馬台国へと旅を続けた結果、到達したのが四国の山々です。邪馬台国への陸行は、歩行が困難な急斜面の多い四国の山々を歩く為、最終の港から30日という長い日数を要します。四国の東香川を基点とし、そこから吉野川を渡り、阿波や藤井寺周辺の山道から神山へ向けて山を登ると、焼山寺を過ぎ、今日の国道438号線に辿りつきます。そこから南方向に山道に向かうと女王串弥呼の宮居が伝承されている悲願寺があり、その地域全体は神山と呼ばれることからしても、悲願寺や焼山寺の在る神山周辺は邪馬台国への入り口であった可能性があります。そして山々の裾に細長く広がる神山の集落から更に西方へと山々を上り続け、木屋平を通りぬけると、剣山の麓に到達します。東香川、讃岐から徒歩でおよそ30日を要する長旅が、剣山の麓周辺で完結するのです。

その途中、標高がまだ、さほど高くない神山から木屋平周辺の山々では、杉造林が集中して行われた地域が広がり、木屋平よりも西側に聳え立つ標高が1500mを超える山々ではミヤマコマツツジが随所に生茂っています。そして広大なササ

原は剣山の山頂から次郎笈や三嶺など、周辺の山々に向けて更に広がり、山々の頂上が野原のようにササ原で生茂るという見事な生態系を造り上げたのです。

大自然のマジックとも思える四国山上の不思議な光景ですが、その背景には、古代の高地性集落が存在していたと考えると間違いないでしょう。瀬戸内海沿いの島々や沿岸に近い山々において、その頂上付近に高地性集落を造営した古代の民は、その後、四国剣山を目指して多くの山々の徒歩で越えながら今日の神山周辺まで辿り着いたのでしょう。そして神山を拠点としてそこから集落を造成し、更に遠くに聳え立つ剣山に向けて、西方向へと居住範囲を広げ、最終的には神山から剣山周辺の山々の随所に高地性集落が造られたと考えられます。その結果、多くの山々では樹木が伐採され、時には焼かれながら、居住にふさわしい地が造成されたのです。

遠く西アジアから渡来者が訪れ、四国に高地性集落を造り始めたのは、紀元前七世紀頃のことです。よって邪馬台国が台頭するまで、700年前後の月日が経つこととなります。しかしながら、前人未到の四国高山において集落を形成するには長い年月を要することは言うまでもありません。また、初代の渡来者の数は決して多くはありませんでした。それ故、少数民族が山を切り崩しながら、土地を開発していく年月を考えると、七万戸とも記載されている邪馬台国の大きさを考慮するならば、正に700年の年月をかけて集落づくりをする必要性があったと考えられます。

朝鮮半島の帯方郡から始まり、史書の記述を頼りに旅を続けた邪馬台国への道のりは、意外にも四国の山上で幕を閉じました。串弥呼を女王とする邪馬台国は、存在したことでしょう。しかし、それは単に西アジアからの移民の歴史が四国では最も古く、高平よりも西側に聳え立つ標高が1500mを超える山々ではミヤマコマツツジが随所に生茂っています。そして広大なササ

ません。その当時、実際には奈良、桜井周辺においては大和の国の土台も着々と構築され続け、人口も増加した時であり、九州北部においては、大勢の渡来者が朝鮮半島から訪れ、新しい文化の流入が加速していました。

剣山を中心とする四国の山々は、神を崇拝する場所として古くから定められていたのでしょうか。その結果、古代の民は必至の思いで山上に集落を築きあげたのでした。瀬戸内海や近畿方面からは讃岐や東香川の港から陸を歩いて山を登りました。また、南西方面では高知から剣山に向けて物部川沿いを歩いて渡り、イスラエルの出自を誇る物部族が大きな集落を物部川沿いに造成したのです。また、東南方面からは、南西諸島や高知から訪れる舟が一時停泊する拠点港がある海陽町から海部川沿いに剣山方面へと向かい、徳島方面からは園瀬川沿いに名東郡まで歩き、神山に到達したのです。

日本の古代史において、海外にまでその名声を広めた邪馬台国でしたが、その歴史は意外な結末を迎えることとなります。自らを神として振る舞う串弥呼の姿は、古いや霊媒を断罪とするイスラエルの神に対する言譴であり、死刑に値する重い罪を重ねていたのです。それ故、串弥呼の亡き後、邪馬台国の衰退と共に、偶像礼拝や霊媒の罪などにより、長年にわたりに汚れてきた土地を清めるため、邪馬台国の集落は徹頭徹尾、燃やされることになったのです。古代の渡来者が精魂こめて開拓した山奥の集落が、再び、人間の手によって焼かれた結果、邪馬台国の存在は跡かたもなく歴史に封じこめられてしまったようです。今日、四国剣山周辺の広大なササ原とコマツツジに包まれた山々に、その壮絶な歴史の面影をかるうじて垣間見ることができます。そして焼山寺と悲願寺は、山上にて燃え上がる集落と山々の悲痛な叫びを今日でも証し続けているのです。(文・中島尚彦)

連載中の歴史コラムは随時更新して
<http://www.history.jp.com/>
に掲載しています。是非ご覧下さい。

成田グルメNAVI

第88回

本格欧風料理とビートルズに酔いしれる名店
欧風料理 ポローニア

成田から三里塚に向かうにはわ道沿い、シックでヨーロッパな風情漂う「ポローニア」のディナータイムに訪れてみた。店内に入ると、ビートルズの美しいメロディが流れ、ビートルズ関連のポスターや写真が数多く飾られている。圧巻なのはビートルズが愛用したリッケンバックやエピフォンのギターが壁一面に所せましと並んでおり、音楽好き

には実に心地よい空間。ディナータイムはフルコースからアラカルト、パスタ等豊富なメニューから選べる。今回はお勧めメニューから「豚バラ肉の赤ワイン煮込み」と「瀬戸内の鯛ムニエル」をチョイス。豚バラ肉はじっくりと煮込まれており、口の中でとろける柔らかさ。奥深い風味のソースも本格的ながら日本人好みの味。付け合わせの小玉ねぎ、インゲンとの相性も抜群だ。鯛のムニエルは皮が香ばしく焼かれた身の締まった切り身とクリーミーな特製ソースが良く合い、素材の味を引き立てた上品な味わい。価格も1,000円～1,500円程度と良心的で、肩肘を張らずに本格欧風料理をゆっくり楽しめる名店だ。

欧風料理 ポローニア
千葉県成田市大清水129
☎0476-35-1666
[11:30~15:00/17:30~22:00]
※定休日:水曜日



総合評価★★★★★

カリフォルニアのおいしい水 アクアヴィル

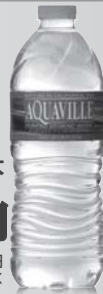
AQUAVILLE

PURIFIED DRINKING WATER 500ml×24本

お手頃な価格でお届けします。
携帯でのご注文はこちら
フィットネスハウス
☎0476-89-3111

478円

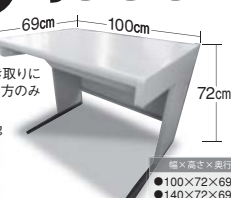
全国どこでも送料 420円
※一部地域、離島は除く



中古スチールデスク

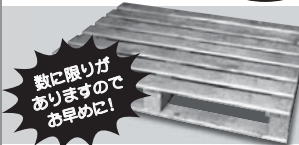
大特価 1,000円

※直接引き取りに来られる方のみ



何にでも使えて便利 パレット

無料でお返しします!



新平工業団地・清掃工場近く(株)ロジハウス
TEL:0476-89-2227
千葉県成田市新泉14-3(平日 9:00~19:00・土曜 12:00~17:00)

体と心をあたためる くつろぎのリゾート

冬の身体とお肌へ アロマで贅沢なケアを



一流施術師のケアを安心価格でご提供
大人のための本格的リゾートスパ

Yayoi SPA & FITNESS

大和の湯

成田の命泉

y a m a t o - n o - y u

- 血液の循環を良くし筋肉をやわらげます。冷え性など多数の効能がある成田の名泉 **大和の湯**
- 伝統的な和食に斬新な発想を盛り込んだ、季節ごとの料理を楽しむことができる創作和風ダイニング **あじ彩**
- 印旛沼の向こうに遠く富士山を望む大パノラマ、カウンター越しの風景から季節を感じる寿司バー **茶苑**

あじ彩 新作を加え、更に充実のメニュー

なでしこ御膳 (980円)

女性にオススメの昼限定メニュー!



玉手箱御膳 (1,500円)

旬の食材をふんだんに使ったディナーメニュー



コチ、海老、カワハギ、フグ、鯖など

淡路島から日々直送

独自ルートで、とれたての魚を淡路から! 入荷する魚は日々変わりますのでご了承下さい。



ハマチのカルパッチョ (800円)



マナガツオ煮付 (980円)

■入館料|平日: 700円
土日祝: 1000円
※小学生の入館料: 300円 (大人同伴の入館の場合)
■営業時間|10:00-22:00
※年中無休(全館調理)

www.yamatonoyu.com
0476-28-8111



JR 成田駅から1駅の
下総松崎駅から徒歩20分
房総風土記の丘・
坂田ヶ池公園に隣接。
大駐車場完備

★ 18 成田駅南口バス
★ サクソ 上総田交差点
★ イオン 成田駅前
★ フロアスタッフ募集
[給与] 時給 1000円 [勤務] 平日 6:00-22:00
[休日] 土曜 12:00-22:00 (夜間)
[休日] シフト制 (夜間)
[資格] 学歴・性別不問 [職種] 接客・販売
電話: 0476-89-2227

WEB サイト案内

日本シティジャーナルをご覧いただきありがとうございます。本紙のバックナンバーはWEB サイトにてすべてご覧頂けます。連載中の歴史に関するコラムは最新情報に随時更新してスペシャルサイト「日本とユダヤのハーモニー」にまとめてあります。また、ご意見・ご要望等をお待ちしております。FAX やホームページからお寄せ下さい。
日本シティジャーナル: <http://www.nihoncity.com/>
日本とユダヤのハーモニー: <http://www.historyjp.com/>

編集後記

新年明けましておめでとうございます。連載を続けた邪馬台国のシリーズも今回で最後を迎えました。詰将棋のように1つずつ駒を進めながら、史書を頼りに答えを見出して行く方法に徹し、その結果、邪馬台国が四国の山上にあったという結論に至りました。しかもその壮絶な最期は、集落の全てが炎上して消滅するというものです。自分でもその結末に驚いています。さて、2013年は何を執筆しようかと、年明けに四国の山々でも登りながら考えようと思っているこの頃です。今年もNCJを宜しくお願い致します。

NCJ 編集長

中島 尚彦



1957年東京生まれ。14歳で米国に単身テニス留学。ウォートンビジネススクール卒業後、ロスアンゼルスにて不動産デベロッパーとして起業。米国ビジネス最前線で活躍する。1990年に帰国後、成田においてサウンドハウスを立ち上げる。現在ハウスホールディングス代表、日本シティジャーナル編集長を兼務。趣味はギターとマラソン、アイスホッケー、及び日本古代史研究。